

イラン国立博物館所蔵楔形文字資料調査報告¹⁾

森 若葉

総合地球環境学研究所

2011年からテヘランにあるイラン国立博物館においてイラン国立博物館と京都大学文学部の間で締結されたMOUに基づいて、イラン出土楔形文字関連資料の調査を行っている。

この調査は、2007年秋に地球研のインダス・プロジェクトリーダーの長田俊樹教授、プロジェクト研究員であった上杉彰紀、寺村裕史両氏の3名がイランの遺跡調査を行ったことにきっかけがある。その際に、現イラン国立博物館長で、当時同博物館碑文部門長であったアクバルザーデ氏から、同博物館所蔵の未公開の楔形文字資料を研究・出版する日本人研究者の紹介を依頼された。帰国後、インダス・プロジェクトメンバーであるシュメール学の前川和也教授（国士舘大学）にその話が伝えられた。ただ、同博物館には楔形資料を専門とするスタッフがおらず、楔形文字資料は碑文部門で管理されているが、どのような資料があるかがわからなかった。前川教授の科研のテーマとの関連性もあり、翌年の2008年に、そのメンバーであった法政大学教授の松島英子氏が、テヘランに滞在し、粘土板の保存状況など予備調査を行うことになった²⁾。その際、松島教授は、スサを中心とするブリック資料について調査を行い、シュメール語、アッカド語、エラム語の資料があることを確認した。

この予備調査の報告を受けて、前川教授は、本格調査を行うため、松島英子（法政大学）、春田晴郎（東海大学）、森 若葉（地球研）を軸に研究体制作りに入った。イランで調査を行うためには研究機関間でMOUを結ぶ必要があった。2009年にそのための予備調査とイラン側の交渉の下準備のために、松島・春田・森がテヘランを訪問した。同博物館碑文部門のアクバルザーデ、ピラン両氏と調査研究計画について話し合いを行ったのち、同館長ミランデシュ氏と会見した（当初夏に訪問の予定であったが、大統領選挙後の情勢不安のため冬に延期された）。彼は今後の研究協力を約束してくれ、この訪問の際に、すでに提示されていたブリック資料のほかに、マルヤン（Malyan）出土の未公開資料についての研究・出版についても打診された。マルヤンの資料はスサのブリック資料とは異なり、小さな粘土板資料中心の資料群である。3Dスキャナーを使った3次元データ化に適した資料であると考えられたため、検討を重ね、帰国後、専門的な知識をもつ寺村氏（日文研〔当時、地球研〕）に研究参加を求めることになった。3Dデータは従来、写真か手写に頼らざるをえなかった粘土板資料研究にとって画期的な技術である。さらに新たに川瀬豊子氏（大阪樟蔭女子大学）、井谷鋼造氏（京都大学）もメンバーに加わり、2010年に秋に、トヨタ財団 アジア隣人プログラム—アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承「イラン国立博物館所蔵楔形文字文書の保存・活用—カタログの作成と3Dデータ化の試み」（代表者：前川和也）が認められた。この研究は、テヘランの国立博物館が所蔵する全ブリック資料についてカタログの出版を行い、一部資料にかんし3Dモデリングを試行するものである。さらに研究協力にかんし協議を重ねた末、京都大学文学部とイラン国立博物館間でMOUを結ぶことになった。それを受けて、2011年3月に京都大学大学院文学研究科長

佐藤昭裕教授から託かった書類をもって、前川教授と森がテヘランに赴き、ミランデシュ氏から交替したイラン国立博物館長アルダカニ氏と会見し、MOUが締結された。その際、マルヤンの資料についても調査・出版許可が下りたため、これら資料についてはじめて調査を行った。2011年4月から、前川教授を研究代表者とする基盤研究A「イラン国立博物館所蔵粘土板文献の調査・研究」が認められ、ブリックとマルヤンの資料について並行して本格調査をすすめることになった（2011年5月調査：前川・松島・春田・寺村・森、2011年8月-9月調査：松島・春田・川瀬・寺村・森（さらに、研究協力者として田中裕介氏（京都大学大学院）、渡邊俊祐氏（同志社大学大学院）が同行））。

本稿では、2011年から調査が始まったマルヤン出土の文字資料調査について、現段階までの調査報告を行うことにする。

マルヤン (Malyan) は、イランのファールス州、シーラーズの北46km、ペルセポリスから西へ43kmに位置する遺跡である。マルヤンは、古名をアンシャン (Anshan) といい、インダス地域とメソポタミア地域の間位置する主要国家の1つであった。アンシャンの名は前3千年紀後半のシュメールやアッカドのテキストにすでにあらわれ、前2千年紀や前1千年紀のエラムの支配者たちは伝統的に「アンシャンとスサの王」を称した。そののち、アンシャンは、初期のアケメネス朝の本拠地となった。アンシャンの位置は長くわからなかったが、1971年のマルヤンの発掘によりマルヤンがアンシャンに同定された。

マルヤンは城壁に囲まれた遺構の面積が約200ヘクタールという広大な遺跡で、その発掘は1971年から1978年にかけてペンシルヴァニア大学博物館の後援のもと行われた。

発掘された資料はメソポタミア諸言語の発音に影響を受けたエラム語で書かれていた。中エラム王国末期の日付が記される。メソポタミアに隣接する地域にあるフーゼスターンのスサなどの資料に比べ、エラム固有の特徴をより残していると考えられる。

エラム語資料は、現在のイランの西南部、フーゼスターン州とファールス州に分布しており、多くは、スサやその周辺のフーゼスターン州の遺跡、ペルセポリス、アンシャン出土のものである。シュメール語、アッカド語、ヘブライ語資料においてエラムとしてあらわれる。言語系統は不詳の膠着語で、南インドのドラヴィダ語族と関連づける議論もあるが、あまり多くの研究者には認められていない。

エラム語の時期的分類は次の通りである。

古エラム語 (Old Elamite) : 前 2600-1500

中期エラム語 (Middle Elamite) : 前 1450-1000

新エラム語 (Neo-Elamite) : 前 1000-550

帝国エラム語 (Achaemenid Elamite) : 前 550-330

古エラムの時期は、通例文書はアッカド語で記されていたためエラム語テキストは少ない。また新エラム語テキストも初期の750年以前は非常に限られている。アケメネス朝時代の帝国エラム語は、ビーソトウーン碑文などのエラム語碑文は筆頭に記されたが、のちの王碑文では、古ペルシア語のあとに記されるようになった。これら楔形文字資料に加え、前3100年頃～2700年頃に用いられた原エラム文字 (Proto-Elamite) による資料がある³⁾。この文字は、未解読であるが、エラム語が記されているのではないかと推測されている。

1972年から1974年に発掘されたマルヤンの資料のうち、Stolperが「明確に定義されるもの」として約114枚を *Texts from Tall-I Malyan* として1984年に出版している。そのなかで、彼は1971年から1978年に出土したそのほかの資料について、多様なものがあり、1984年と同時代のエラム語資料のほかに、中期エラム語がしるされたレンガ碑文、土器片、石製品、初期のアッカド語のレンガ碑文、シュメール語の行政経済文書があると序文に記している（Stolper 1984: xi）。Stolperによると、出版した資料は、考古学的に、中期エラム後半の前1300年から前1000年の間、字体から中期エラムの末期と推測されるものである。

Stolperは当初、他の資料についても出版する意向であったようだが、その後出版されず、30年近くが経過している。今回イラン側の許可を得て調査を行っているのは、マルヤンの資料でStolperが出版しなかったものである。イラン国立博物館が所蔵するマルヤン出土資料として、現地点でM3からM1810まで382点の資料を確認している。資料は基本的にMの何番という番号が付されている。この番号は、文字資料以外の含むマルヤンの出土資料の通し番号である。この382点のうち、114点がStolper (1984) で出版されており、そのほかにも写真での出版がいくつかある⁴⁾。

Stolperはおおよそ中期エラム時代後半の行政経済文書にしばって出版を行っている⁵⁾。調査対象としている未出版資料には、表面採集による資料も含まれ、状態のかなり悪いものもあるが、時期、内容ともに多様な文書が含まれ、非常に重要な資料群である。

楔形文字資料については、写真・翻字・翻訳・注釈を付した出版を予定している。写真と3Dモデルについては、CDに収める予定である。原エラム文字資料（M632、M1000-1004、M1006、M1152-1156、M1473-1481、M1626）については、いまだ未解読であるため、写真と3Dデータによる出版を行う。5月と8-9月の調査では、未整理の状態にあった資料の整理・確認作業をピラン氏とともにを行い、日本側のメンバーで資料の写真を撮影した。3Dモデリングについては、寺村氏の指導のもと、渡邊氏、ピラン氏が、楔形文字資料と原エラム文字資料にかんし作業を進めている。3Dレーザースキャナーを用いた現地でのスキャニング作業は、68点（一部は博物館の許諾を得てStolper 1984収録済みのものも含む）を終え、現在データ処理中である。マルヤンの資料番号ごとに写真撮影を行い、下記の項目にかんしカタログ化にむけた整理を行っている。

- ・素材（粘土・骨・石など）
- ・形状（ブリック・粘土板など）
- ・サイズ
- ・資料時期
- ・出土場所
- ・状態
- ・面（表・裏・側面など）
- ・言語（エラム語、シュメール語、アッカド語、原エラム文字資料）
- ・資料のジャンル（行政経済文書、王碑文、語彙リスト等）
- ・ほかの番号（博物館内の番号など）
- ・出版情報（Stolper 1984を始めとする既出版情報について）

楔形文字、原エラム文字資料のほかに、シーリングだけのものや無文字の資料もわずかに含まれる。

形状としては多くが粘土板もしくはその断片であるが、レンガの断片も含まれている。

行政経済文書の粘土板は、横長で小さいものが多い。タテの長さや厚みの差が少ないため、板状というよりは細長で丸みを帯びコロコロした印象である。Stolper (1984:16) は、4センチから7センチの葉巻形であると記述している。残念ながら資料のほとんど断片であるが、完全なもののサイズを測ると、たとえば、M732は2.0cm × 3.7 cm × 1.6cmである。これはStolper (Stolper 1984, No.54) によって出版されており、彼の手写コピー(図1)で確認されるように、8行記されている。左から右に1行ずつ順に下の行へ表面からぐるっと回転しながら読むことになる。

また、調査中の資料で完全な形である資料はM1464 (2.4cm × 4.5cm × 1.2cm)、M1484 (3.3cm × 5.6cm × 1.6cm) であり、ほかの断片からもこのような形状が多いと考えられるが、少し大きめなものに横長の長方形の板状のものがある。資料内容の分析はまだこれからであるが、行政経済文書以外に王碑文などが含まれている。

原エラム文字の粘土板には、M632、M1001-1002、M1003、M1004、M1006、M1152、M1153、M1154、M1155、M1469、M1473-1481、M1626がある。これらは横長の板状の粘土板である。図2のM1000は註4で述べたように、Sumner (2003) のPl.21eでmf1685として収録されている。

サイズは4.3cm × 5.5cm × 1.6cmで、左が表面の写真、右が左右返した裏面である。レンガ資料はすべて断片で、6～8cm角のものも多く、大きいものとしては、M1456 (8.5cm × 18.0cm × 8.2cm) がある。2つ以上の面に文字が記されたコーナブリック (M692、M919、M1169) もある。レンガ資料は建造物の壁面に記されたもので、その内容は王碑文である。

粘土板とレンガ以外の粘土資料には次のようなものがある：M252は円錐形資料 (Cone) の断片である可能性が高い。さらにスタンプが押された封泥の一部 (M593、M636)、円筒形文字資料 (cylinder) の断片 (M906 (Stolper, No.105)、M1482)、容器片 (M1460) がある。

粘土以外の素材としては、骨 (M555) やアラバスター (M172) の資料がある。写真撮影に

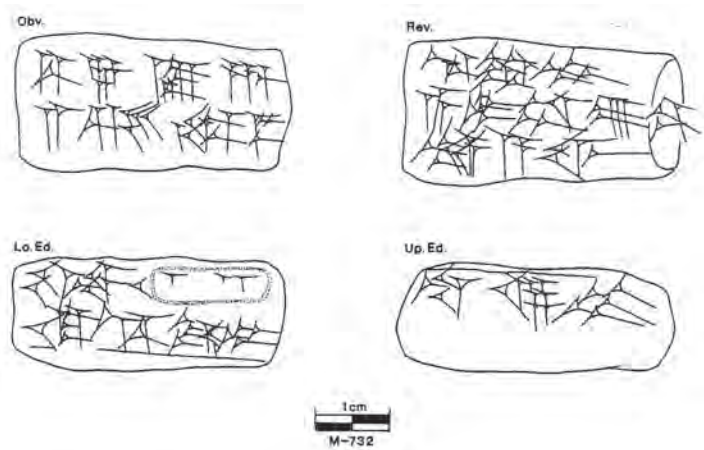


図1 マルヤン出土エラム語行政経済文書資料。M732。Stolper 1984, No.54より



図2 マルヤン出土原エラム文字資料。M1000 (mf1685)。Sumner 2003, Pl.21eより

については、Stolper 1984 等による出版が確認されているもの⁶⁾、および非常に状態の悪いものについては現在のところ行っていない⁷⁾。

本調査は現在 1 年目であり、今後 4 カ年継続の予定である。テヘラン所蔵のレンガ資料について、全資料のカタログと、マルヤン出土資料数点の 3D モデルについては、2012 年末に出版の予定で、その後、未出版ブリックの資料研究とマルヤンの未出版資料の総合的な出版を 4 年後に予定している。

インダス・プロジェクトの調査が契機となり、イランと日本の共同研究・出版プロジェクトが立ち上がったことはたいへん意義深い。楔形文字研究にとって非常に重要な調査にメンバーの一員として参加できることをありがたく思っている。

【註】

- 1) この研究は、トヨタ財団 アジア隣人プログラム—アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承「イラン国立博物館所蔵楔形文字文書の保存・活用—カタログの作成と 3D データ化の試み」（代表者：前川和也・国士舘大学・2010.11～2012.10）、文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 A（海外学術調査）「イラン国立博物館所蔵粘土板文献の調査・研究」（研究代表者：前川和也・2011 年度～2015 年度）、文部科学省科学研究費補助金 若手研究 (B)「シュメール語動詞接頭辞の形態論的研究—前三千年紀後半～二千年紀前半の資料分析」（研究代表者：森 若葉・2009 年度～2011 年度）の助成を受けている。
- 2) この調査は、特定領域研究「セム系部族社会の形成」計画研究班「シュメール文字文明の成立と展開」（研究代表者：前川和也・2005 年度～2009 年度）の助成を受けたものである。その予備調査の報告は、松島英子 (2010)「イラン国立博物館（テヘラン）」の楔形文字資料調査について」前川和也編「セム系部族社会の形成」『計画研究「シュメール文字文明」の成立と展開」平成 17～21 年度研究成果報告』15-16 頁にまとめられている。
- 3) さらに、エラム語を記した文字としては、エラム線文字 (Linear Elamite) がある。
- 4) M1494 については、マルヤンの発掘報告書第 2 巻 (Carter 1996) に写真での出版がある。また M1000 についても発掘報告書第 3 巻に写真出版がある (Sumner 2003: Pl.21e, mf1685 [only photos])。原エラム語や文字がないものについては、未把握の写真がある可能性があり、現在確認作業中である。M1483、M1513 は、M1222（博物館で未確認）とともに、Stolper 1984 の p.18 の figure 6 に写真がある。粘土板の断片で、エラムに特徴的な粒を集めた印章が押されている。
- 5) Stolper (1984) では、出版した粘土板の内容について 16 ページから 18 ページにまとめられている。No.1～No.99 までが行政経済文書、No.100～No.102 が王碑文である。さらに No.103～No.114 がその他 (miscellany) としてまとめられているが、これらは行政経済文書の断片であると思われる。
- 6) シーリングのある土器片 M591 と封泥 M593 はカーターの発掘報告書に線描がある。
- 7) 状態がよくないため、未撮影の資料は次の通りである：M555、M627、M707、M923、M926、M978、M985、M986、M992、M1005、M1020、M1023、M1024、M1120、M1122、M1125、M1126、M1128、M1129、M1133、M1134、M1135、M1136、M1137、M1139、M1140、M1141、M1142、M1143、M1144、M1145、M1146、M1148、M1150、M1151、M1159、M1162、M1163、M1164、M1165、M1166、M1168、M1447、M1585、M1590、M1591。さらに、M520 については、2011 年 12 月の調査後にイラン国立博物館から報告があったもので、まだ、資料の確認ができていない。

【参考文献】

- Carter, E. (1996) *Excavations at Anshan (Tal-e Malyan): the Middle Elamite Period*. Philadelphia, University Museum of Archaeology and Anthropology, University of Pennsylvania. University Museum Monograph <BA00718588> 82. Malyan Excavation Reports. Vol. 2.
- Grillot-Susini, F. (2008) *L'Élamite. Éléments de Grammaire*. Paul Geuthner. Paris.
- Hansman, J. (1972) "Elamites, Achaemenians and Anshan", *Iran* 10.
- Stolper, M. W. (1984) *Texts from Tall-i Malyan*. Vol. 1. Distributed by the Babylonian Fund of the University Museum (Occasional Publications of the Babylonian Fund. 6).
- Stolper, M. W. (1990) "Elamite Fragments from Tchogha Pahn East and related Fragments", *Contribution à l'histoire de l'Iran : mélanges offerts à Jean Perrot*. Textes réunis par François Vallat - Éditions recherche sur les civilisations, pp. 151-161.
- Stolper, M. W. (2008) "Elamite", In Woodard, Roger D. (ed.) *The Ancient Languages of Mesopotamia, Egypt, and Aksum*. pp. 60-95.
- Sumner, M. W. (2003). *Early Urban Life in the Land of Anshan: Excavations at Tal-e Malyan in the Highlands of Iran*. University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology (University Museum Monograph 117. Malyan Excavation Reports. Vol. 3).